

1 信仰の告白としての使徒信条

先週は十戒を取り上げました。今週は使徒信条を取り上げます。十戒はこれまで少しなじみが薄かったかも知れませんが、使徒信条は、私ども、毎週の礼拝でも使っているものです。

十戒が聖書からほとんどそのまま取られていたのに対して、使徒信条のほうは、聖書に、この場合は、新約聖書ですが、そのままの形ではありません。ごく早い時期の教会で、聖書ができてすぐあとぐらいの頃にできて、それが広がり、やがて権威あるものと見なされるようになった文書です。

われは天地の造り主、全能の父なる神を信ず。

われはその独り子、われらの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより生れ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがへり、天に昇り、全能の父なる神の右に坐したまへり、かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまはん。

われは聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交はり、罪の赦し、身体のみがへり、永遠の生命を信ず。アーメン
(讃美歌九三の4)

これが使徒信条です。諳んじておられる人も多いと思いますが、一字一字、本文を確認しながら唱えるのもいいと思います。

使徒信条を私どもは礼拝で使っていますので、その辺から申し上げるのがよいかも知れませんが。

私どもの礼拝では使徒信条を、説教の後、献金の前に、唱えています。どういう意味で、そのタイミングで唱和するのか、はじめにそれを考えてみたいと思います。

私どものこの礼拝、大きくとらえれば、一方に神、他方に人間、この二つのあいだの掛け合いです。説教の後、と言いましたが、説教は聖書朗読と共に、神からの私どもへの語りかけです。その語りかけに対する私どもの側の応答、それが使徒信条、献金、主の祈りになります。

神の語りかけに応答する、信仰をもって応答する、そこで使徒信条を用いるということです。そうすると使徒信条に託して私どもの信仰を言い表している、告白しているということになります。使徒信条は私どもの信仰の簡潔な言い表しでもあるという理解がそこにあります。

もちろん説教の後というタイミングで、私どもが自分の言葉で、主よ、信じますと言ってもいいのです。しかしそうせずに、わざわざ使徒信条を用いることには、大切な意味があります。

自分の言葉で言うことも大事だとは思いますが、キリスト教の信仰でもっと大切なのは、イエス・キリストが教えてくださった信仰に立つということです。そしてイエ

スが教えてくださった信仰は、使徒たちに受けつがれ、それがまさに聖書になったのです。その聖書に受けつがれた信仰が、同じく使徒たちの手で、使徒信条として整えられたのです。それを受け入れる、それに接続する、したがって共に唱和する、そこに私どもの信仰は表されます。それは、普遍的な世界の教会に加えられた者の喜びの告白でもあるのです。

使徒信条はキリスト教信仰を簡潔に言い表したものであり、世界の教会の共通の告白でもあると申しました。

もう一つのことを申し上げておきます。そもそも何のためにつくられたか、なぜこういったものができたのかということですが。

使徒信条はもともと、洗礼式にさいしてなされる告白問答のためにつくられたと言われています。洗礼志願者に、洗礼を授ける人が、その信仰を問うわけです。当然「あなたは」と問うはずですが、あなたは、父なる神を、御子イエス・キリストを、御霊を信じる、と。洗礼志願者によるその答えは、「わたしは」で始まらなければなりません。使徒信条が「われは・・・信ず」と、一人称単数で告白していることは、こうした告白問答から説明されます。いずれにせよ、今日、信仰の簡潔な告白として、教会の信条として、カトリックもオーソドクスも、プロテスタントも、世界の教会が、それに拠っている、それが使徒信条なのです。

2 教会の建設

もう少し使徒信条のことを申し上げたいのですが、その前に、今日示された聖書箇所により、信仰と告白、そして告白と教会の関係を、基本に返って見ておきたいと思えます。

ガリラヤの北、フィリポ・カイサリア地方で、ペトロが、イエスをメシア、キリストと告白したという出来事は、マタイだけでなく、マルコにも、ルカにも出ている福音書のもっとも重要な場面の一つです。

今日の箇所によれば、イエスご自身が、弟子たちに、民衆は自分のことをどう見ているのか、お尋ねになります。弟子たちはいろいろ答えます。一つ一つ、本当にそう噂されていたのでしょうか。ある人たちは、あなたを「洗礼者ヨハネ」だと言っています。「エリヤだ」という人もいれば、「エレミヤだ」、いずれにせよ「預言者の一人だ」という人もいるというわけです。

しかし、いうまでもなく、イエスは、弟子たちが、自分をどう見ているか聞きたかったのです。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」。ペトロが弟子を代表し答えます。「あなたはメシア、生ける神の子です」（一五〜一六節）。これこそ信仰の告白と言うべきものでした。

もちろんここに至るまでも、イエスと伝道の旅を共にして、その言葉、そのいやしのおわざ、その祈りの生活に触れ、イエスが特別の人であることは、弟子たちもよく分かっていたと思います。しかしここに至って、はっきりとイエスをキリストと、神の子と告白したのです。段階が一つ進んだのです。

これらのエピソードは、ペトロの、あるいはペトロに代表される弟子たちの信仰の告白として、申しましたように、マルコにも、ルカにもある重要な場面です。しかし

マタイだけは、それに加えて、イエスがユダヤ教の会堂（シナゴグ）と区別して教会について言及した、聞き逃すことのできない、重要なイエスの言葉を私どもに伝えていきます。

わたしも言うておく。「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない」（一八節）。

新約聖書で、イエス・キリストを教会の建設者と語っている、ここは唯一の箇所です。教会を建て上げてくださるのは、神であり、イエス・キリストであって、牧師でも信徒でもありません。キリストの体としての教会を建て上げるのは、その体の頭であるキリストです。

それなら、どこに、何を土台に建てる、というのでしょうか。この箇所は注目すべき言葉を私どもに伝えていきます。「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる」と。

じつはここには「ペトロ」という名前をめぐってのちよつとした遊びといったら強すぎますが、言葉の綾のようなものがからんでいます。

整理して言うと、ペトロの本名は、シモンです。ヨハネの子シモン（ヨハネ一・四二）です。今日の箇所でシモン・バルヨナ（一七節）とある、それです。これが本名です。ところが、あるとき、このシモンがイエスから、ケファというもう一つの呼び名をもらうのです。ケファはアラム語で、意味は、石、岩、です。それをギリシャ語にしたのがペトロです。

イエスがここで、あなたは「ペトロ」と言い、つづけて、この「岩（ペトラ）」の上と言っているのです。「この岩の上にわたしの教会を建てる」とは、ペトロの上に教会を建てるということだとも考えられるところです。カトリック教会はじつさいそのようにとって、ペトロを初代ローマ教皇と見なし、それを継承する自分たちの教会の正統性を主張してきたのです。

しかし教会の土台のようなものをペトロ個人に求めるのは、聖書の他の証言からして無理があります（マルコ一・一〇、一コリント三・一〇、エフェソ二・二〇、黙示二一・一四他）。土台はキリスト、それを証しする聖書であり、それに基づき、ここでペトロがなした、「あなたはメシア、生ける神の子です」（一六節）との信仰の告白です。この信仰の告白の上に、イエスが自身を教会を建ててくださるのです。「この岩の上に」とは、私どもの信仰の告白と受けとってよいと思います。その教会に「陰府の力もこれに対抗できない」のです。

3 陰府「下り」

もう一度使徒信条に戻ります。使徒信条は、現在、世界の教会の、共通の、最古の信条としてあるだけでなく、そのもとを辿れば、一人一人の信仰の告白だということを示し上げました。

ご存じのように（参考のためプリントしてお配りしています）、日本基督教団信仰告白（一九五四年）は、この使徒信条に、使徒信条よりも長い序文をつけてできあがっているものです。

その序文では、旧新約聖書が神の言葉であり、私どもの信仰と生活の誤りなき規範であることや、私どもの救いはただ信仰による（信仰義認）など、プロテスタントの特色を出しつつ、その立場から、世界の教会に共通する使徒信条を受け入れる、告白すると述べています。

ですから使徒信条が基礎になっているのです。今日は各条項について詳しく申し上げることはできません。他のたくさんの信条、信仰告白と比較して、使徒信条にしかない言葉を一つだけ最後に取りあげておきたいと思えます。それは「陰府に下り」というところです。

この文言が出てくるのは、イエス・キリストについての告白の中です。父なる神と聖霊なる神との告白に比べて、キリストに関してはいささか不均等に長い、その中です。

十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがへり・・・

これを単純に読めば、イエスは死と復活のあいだ、陰府の世界で過ごした、ということですが。これがなくても、意味は分かりますし、十分通用します。なぜこうした文言が入り、残りつづけたのでしょうか。じつは聖書には、それを暗示する箇所があるのです。ペトロの手紙一です。

霊においてキリストは、囚われていた霊たちのところへ行って宣教されました（三・一九）。

死人にさえ福音が宣べ伝えられたのは、彼らは肉において人間としてさばきを受けるが、霊においては神に従って生きるようになるためです（四・六、口語訳）。

こうした聖書の言葉が、使徒信条の文言になったのだと思えます。使徒信条をまとめた人びとは、イエス・キリストの救いを述べるのに、このことは省くことができな

いと考えたのです。「陰府（黄泉）」というのは、聖書では、死人の行くべき場所、地下の陰惨な場所とされています。そこに下った死人は、世の終わりの日に復活し審きを受けるのを待っているのです。いわば陰府は待合室です（ヨハネ五・二九）。しかしペトロの手紙は、イエス・キリストは、万人の救い主として陰府にまで下り、死人にも福音を説いたと述べています。

宗教改革者のルターもカルヴァンもこれをイエス・キリストとの救いと関連づけて積極的に理解しています。今日は詳しくは申し上げません。しかし、二人とも、キリストの救いの広さと深さとをそこに見ていることは確かです。だれ一人、キリストの救いから閉め出されてはいない。地獄と呼ばれるところもイエス・キリストなき場所ではない。して見れば地獄はないのです。この聖書に証しされたキリストの救いの広さを、使徒信条は、他のどんな信仰告白にもまさって明らかにしています。これを私どもこれからも土台にしてまいりましょう